

— 幼 児 の 社 会 性 —

樋 口 澄 雄



— 社会性について考えると、小学校低学年と幼稚園一年保育とは同じ時期にあるといつてよいと思う。したがってこの論では、小学校で努力している点と同様のことについてのべるようになるかもしれない。そしてこゝで望ましいと思うことは小学校の二年生あたりで完成したいものである。 —

一、群むねから集団への指導

端的にいつて、子どもたちが、四人、五人とグループになつてままごとをしたり、さまざまのごっこ遊びなどしているその心的方向を群むね的なものから集団に高めたいということである。

ある子は小さなほうちようで菜をきざんで勝手しごとをしている。ある子はテーブルの上にさまざまの食器をならべている。そして別のある子は人形で遊んでいる。こうして一つ

のグループでままごとが行われている姿をみて、私たちはあつた遊びの中で社会性は培われていくとみている。事実、いろ／＼の角度の社会性は培われていくと思う。しかしこれを子どもの集団への心の傾きという角度からみて、それはより高次の社会生活に引きあげられているだろうかという問題がある。私たちが教育という目的活動をしている場合、こうしたグループの活動により速かに、より高い社会性を持たせるような指導の工夫が必要ではないだろうか。このことについて考えてみたい。

私たちは一がいに幼児は自己中心的傾向をもっているという。このことにまちがいがあるとは思えない。しかしこの自己中心的傾向を一日も早く社会性のある考え方、み方、行動のあり方に高めていくにはどうしたらよいかこの点について考えなければならぬ。その場合単に自己中心的傾向をそのままは認してそつあるのがあたりまえであるときめこんで、ノホホンとしている訳にはいかなぬ。そこでままごとでも菜をきる子、食器を並べる子、人形と遊ぶ子がバラ／＼に自己の欲するままに、たま／＼同じ場所ばしょで遊んでいるという行き方から、即ち一人／＼がバラ／＼で単に同一場所ばしょに集まっているという、群むね的あり方を、その子たちが共通の目的に統一された遊びの中に自己の立場を認識して遊ぶという集団的あり方に指導したい。このことは小学校でおうちごっこをする場合

も、お店こつこつをする場合も、強く要求されていることである。丁度三年生頃からのデスカッションでも同一問題について建設的発言を指導するのと同様である。

それには幼稚園でやっている「自由遊び」のあり方に、多少の問題やら工夫すべき点があるように思われる。「自由遊び」が子ども一人一人の欲する興味ある行動（遊び）を選択させるという原則がまま曲解されて、悉皆欲望満足主義的の方向にながれて、単に出来ごころ的衝動による興味の選択のまゝにおかれたり、友人の選択した遊びに流されて、追従的行動の赴くまゝに放置されたりしていることがないであろうか。このことについては、自由ということの解釈についても考えなければならぬ点もあるし、遊びという概念についても、考えをも一度まじめ直してみなければならぬのであるが、こゝではしばらくおくとしても、子どもの全生活を見渡して、又その子の性格をみた上での指導点などを考えて、遊びの種別について指導する必要がある。このことは干渉でもなく、束縛でもなく、指導のあり方であろう。次に教師の指導によって選択された遊びについて、グループを構成した場合、そのグループの人的構造を立体的に持つようにすべきであるということである。即ちグループの目的をはっきりさせ一人一人の子どもがその目的に対する行動のあり方（役割）を自覚させる方向に持っていくということである。いいかえ

れば、グループに構造と組織を持たせるように導くということである。このことについては、最初にのべたように小学校の段階において強く要望されているのであるが、もし幼稚園時代に個人一人一人のわがままの興味欲求の満足だけで遊びを指導しておいたら、その行動の傾向というか、場に対する体験による反射行動となつて、新しい指導がなか／＼むずかしいという場面につきあたるのである。したがつて、幼稚園時代に完全にこういう希望が達せられるとは思わないが、常にこういう方向に子どもたちを導き、考えさせていくことが大事なことだと思つてゐる。

「あなたのいましているたべものは、おとなりの〇〇さんにわたすのですか」といったように、グループ内の他の人々のしごととの関連や全体のしごととの関連を、つねによびおこすような指導が大切だと思われる。

こうしてグループが、群的あり方であるものを集団行動に高めていく方向に指導することが、幼児の現実の人間関係のあり方を知る社会性を育てるために大事なことだと思ふ。

二、しごとと事物の理解

前項では社会性の二つの大きな柱である「人間関係のあり方」についての一つの問題点をとりあげてのべてきた。この項ではもう一つの柱である「人と自然や事物に関して理解すべ

きことなら”のうち、しごとと事物の理解のことについて考えてみた。

私たちが社会性を育てるという場合、しばしば社会性と交際法といったことを混同して、大ぜいの中で即ち社会の中でどのように他の人と協力したり、責任を果したり、規律を守ったり、親切だったりというようなことだけに限って考えている場合がある。しかし私は子どもでも、社会の理解という知的な裏づけがないと、よい行動は生れてこないと思う。又そうした知的裏づけこそ大切な学校教育の分野でもあると思つてゐる。子どもたちが単なる思考なしの行動の重積によつてのみ、経験的に社会理解をするというだけではないかと思う。社会理解は幼稚園時代から十分考えていくべきである。もつとも社会理解といつても、社会科学の初歩を教えるといつたものでないことは論をまたない。もつと包括的、生活的に社会の理解の初歩段階を行うべきである。しかもそれは行動的、経験的であるであらうし、思考を伴つて行わるべきであらう。

子どもは大人のしごとのまねを遊びの中にとり入れながら生長していく。したがつて、ごつことか、ままごとが幼児の遊びの中に自然に入りこんでくるのは、子どもの自発的、自己教育といつて過言ではない。そして教育者はこの自然的な方法をとり入れてその方法体系の中うちこみ、その中で意図

的教育をしようとしてゐるのである。最近小学校の課程でもごつことをとり入れて教育活動に用いてゐるのは、こうしたところに着目したからである。

こうしたことを考えてみると、模倣遊びの取り扱いにおいて、私たちは教育的意図をどのように考えていくかをきめることが大切なしごとになつてくる。

そこで考えられることは、幼稚園のごつこ遊びが、やゝ遊びのための遊びに流されていられないかということである。家庭で遊んでいる自然の姿を園において、そのまゝやらせているといつてはいいすぎかもしれないが、教師の意図が少々かけていられないかと思われる。もちろん幼稚園が単に時間つぶしのおもひ程度に考えて、子どもに遊ばせているとは考えていないが、何か新しい教育思潮が入つてきてから、子どもの欲求や興味ということにおされて教師が臆病にあとずさりをしてゐるのではないかと思われるのである。同様のことは戦後の小学校の中にも多分にあるが、幼稚園はもつと前から新思潮をとり入れたので、こうした欠かんがマンネリズム化して入りこんでいられないかと思ふのである。子どもの興味とか欲求というものと教師の指導ということの間には、むしろかしい判断や方法上の問題があると思ふのである。しかし子どもの興味や欲求の発生過程、表現などを十分考慮しないで、ことばやむすかりに負けては折角の指導がおぼつかない

と思う。しいていえばこうした欠かんの一ばん多くあらわれているものは、このごっこ遊びである。ぶらんことかすり台のように、単一の目的を持つ遊びはかんたんであるが、ごっこのように複雑した遊びでは、教師の意図的指導のいかんが、前にいった社会理解のいかんを決定する大きな要素になってくると思う。

そこで幼稚園においても、ごっこ遊びなどの中で、大人のしごとの理解ということに指導者側ははきり考えておし出すべきである。遊びはしごとと続く労働教育の道である。ごっこの中で父や母や社会の人のしごとを理解することを努めてやっっていくべきである。又さまざまな遊びの中で常に施設その他の事物の正しい理解ということを考えていくべきである。知は正しい行動の道しるべである。幼稚園は幼稚園ながらの大人のしごとの理解や社会的事物の理解を促して、子どもの社会性の豊かな思考や行動への基盤に培わなければ、新しい時代の教育にはならないであろう。

(西桜小学校長・同附属幼稚園長)



幼稚園からの

子供を迎えて

—幼稚園と小学校の一貫性—

小 原 武 雄



毎年四月になると、幼稚園を終えた子供たちが大ぜい小学校に入ってきて来ます。入学式の当日は晴々と喜びに満ちた母親が付添って参ります。うれしそうな子、はしゃぎ廻る子、得意そうな子、沈んでいる子、心配そうな子、泣き出す子……等々。

さて、この様々な子供たちを、これからどう指導して行くかということが、一年生担任教師の直面する現実の重大問題であり悩みであります。『近頃幼稚園から来た子供は、前とちがってどうもがさがさしていますね。どうしてこんなに落着きがないのでしょうか』と小学校の教師。『小学校に行っ。た子供は可愛相ね。遊び道具はたったボールだけ、それで毎日あいうえお、一つ二つのおかんじょう、次が何の時間、次が何々、もっと幼稚園らしくなければねえ……』と幼稚園の教